

Steinbeck 研究

森 政 勝

(7) style と technique と humor

Steinbeck の芸術の簡潔性、単純性、平易性、やわらかみなどには、われわれの心を引くものがある。このような性質は彼の小説構成の手段の特異さによる。その手段とは、作中人物の知的低水準、彼らが口にする局限された用語数、彼らを選定する場合の社会的環境、更には、作者が筋を運ぶ際に用いる余り広くない用語範囲などである。作中人物が語る語句、あるいは、作者が用いる非常に圧縮された語句が、有るがままの世界や現実を、その偉大さ、恐ろしさ、醜さの中で表現できるのは、作者がその世界や現実に対し親しみをもち和合的な性格の持主であることを示している。Dos Passos や Faulkner が少しの熱意もなさそうに現実の姿を描くのは、その現実に対して愛情を持たず、周囲の世界に抵抗を感じずからであつて、Steinbeck の行き方とは非常に違つている。Steinbeck は現実相の内包する野卑で醜く恐ろしい要素を、方言、常トウ（套）語、ひどく変形された下品な言葉などを用いて——彼も一個の偉大な stylist である——完全に変ボウ（貌）させることに成功したので、その現実とはもはや野卑でもなく醜くもなく恐ろしくもなくなつた。彼の芸術には本質的な限界があり、その限界の中で彼は人間を巧みに描いている。しかも最も本質的要素的な言葉、すなわち、人間同志ないしは人間と他の存在物とを結び付けるに役立つ言葉をもつて。しかし彼の表現の範囲は、文章構成法の失敗と用語数の貧弱さによつてはなはだしく制限されており、その文章構成法には論理的連関を表わす力はないのである。用語数の貧弱さは彼が好んでそうした（Racine のように）のではなく、ある必々からなされたものであつて、圧縮されたと評するのが正しい。この必要さは、彼の用いる方法から出ているのかも知れず、それとも、主題の性質が生み出したものであるかも知れない。

Steinbeck の文体が、責任の mellifluous な回避であるかどうかは、批評家によつて意見はまちまちであるが、彼が正しい英語の成句やリズムに気を配つていたことは事実である。彼の用語は、およそ知的なものとは言いがたいが、彼はこれを巧みに、かつ、効果的に用いて、英雄主義、共産主義、慈善、男性的交友など、日常生活のもろもろの实在物を表現しており、そこには何らのぎごちなさも、読者を困惑させるようなものもない。これは、彼のねらいがこうした实在物そのものではなかつたからである。と言つてもそれは決して現実からの逃避ではない。Keats と同様逃避をきらう彼は、自分の守りを絶体的内在物の中に見出したのである。現実の変ボウ（貌）は文学的過程としては、作品の内的リズムとなり、主題と対偶主題が規則正しく再起する fugue 的手法（*Of Mice and Men* に見られる）となる。Balzac は自らの小説構成法を Rossini 的であると自慢したと言われるが、Magny によれば「*Of Mice and Men* は Bach のような構成を持つている」のである。しかも Steinbeck の作品は Bach と同じように清澄な荘重さにまで達していた。一方劇的表出は Steinbeck の小説構成に極めて重大なものであり、この表出に依存しているのが彼の小説の form であるが、彼が歴史的伝統的な多くの小説の form に目をそそぎ、それに非常な関心をよせていた

ことは事実である。この劇的演出は大部分が対話に基礎を置いており、それが簡単な叙述的章句で連結され、特別な解説めいたものは少い。彼の cold な散文と劇的演出は、客観性を作者と小説の間、または小説と読者の間に作り出す重要な方法であるが、もう一つ彼の特異なものに、彼が phalanx theory (この説は人間を神秘的、社会的、心理的、生物学的単位として考えるもので、彼の group-man theory と同じものである)と呼んだものを基礎とする手法がある。これは *In Dubious Battle*, *The Leader of the People* その他の作に見られるもので、端的に言えば、集団的人間の image を常に念頭においてあらゆる人間をながめようとする手法のことである。Steinbeck は好んで小説の結末を劇的にするが、それがしばしば表面的な realism とはちぐはぐになることがある。このことは気になるが、そのために比喩(喩)と象徴の根底はかえって強化されるものと考えられる。彼は象徴的手法と比喩(喩)的手法には不断の関心を示していた。象徴は主として性的な面に用いられ、比喩(喩)は政治問題に多く用いられたが、彼は長い作家生活を通じて、この比喩(喩)的手法を最も大切な文学的手法と考えていた。彼はこのような二つの手法を用いながら、勝れた綿密な文体を作った。どちらかと言えば、楽天的でロマンチックな世界観をもっていた彼は、感受性の強いロマンチックな作家であるとも評し得よう。さて彼の作品中最も dramatic であると考えられるのは *The Moon Is Down*, *Burning Bright* であり、*Of Mice and Men*, *In Dubious Battle*, *The Grapes of Wrath*, *The Pearl* などはこれに次ぐ。解説の多いものは *Tortilla Flat*, *Cannery Row*, *Sweet Thursday* などである。

彼の用いた手法としては、次に、主人公の非人格化を上げなくてはならない。この手法によつて、小説の中に客観的な距離が見事につくられている。彼はこの distance technique には熱心で、そのために人物描写の客観的価値を増大させている。Steinbeck は living な人物の創造には無能力である、と多くの批評家は責めてはいるが、彼らは客観的価値の増大という重要な結果を見落としがちである。非人格化の例は *The Grapes of Wrath* に出てくる Joad 一家の場合にも見られる。この一家のものは、個人性を十分には意識しない状態のまま、すなわち個人以下のままでいるのである。また *In Dubious Battle* の Mac と Jim は二人で一人の人物の役割を果たすのであるが、内的進化が終つてしまうために非人格化すると見なされるわけである。Steinbeck は小説を非人格化することには全く満足しているのであつて、そのために一種の壮大さと落ち着きが出てき、それが彼の本質的な特質となるのである。なお彼には、この非人格化と密接な関係にある非個性化という重要な手法がある。作中人物の非個性化をやろうという意志は初期の作品中にも見られないことはないが、それが明確に意識されるようになるまでには十年がかつたと言われる。*Cup of Gold* の略奪の場面 *Tortilla Flat* の貧しい人びとなどを見ると、その中心は特定の間人間ではなく、一つの集団であることがわかる。人間個性の否定がはつきり認められるのは *Of Mice and Men* である。この中には George と Lennie という組み合わせがあるが、この組み合わせは、人間と怪物と見てもよく、良心と獣性と考えると差しかえぬが、この組み合わせから一人の主人公が作り出されているのである。また、前述のように *In Dubious Battle* では Mac と Jim という組み合わせが出てくる。この二人は同じ努力——ルンペン・プロレタリアートの組織化——への共通の参加によつて結ばれている。この作の本当の主人公は、個人的なこの二人ではなく、二人の共通の努力であるストライキである。しかも、このストライキを一つのエピソードとする非個人的な非常に大きな事件をわれわれにベッ(瞥)見させる。なお、このような

人物の重なり合いは *Tortilla Flat* の Pilon と Danny にも見られる。さらに、彼の手法の一つに、素材をエピソードの形にする傾向 (*The Pastures of Heaven* について書かれた彼の手紙によつても明らかである) がある。彼によればエピソードは invariably grow into novels である。エピソード的構造、あるいは inter-chapters の使用、ないしはこの双方を同時に使うことが彼の小説の特色である。 *The Pastures of Heaven*, *Tortilla Flat*, *The Grapes of Wrath*, *Cannery Row*, *Sweet Thursday*, *The Red Pony*, 1937 などにはその例が見られる。以上のほか、彼には、小説に信頼性と生命を与えるための工夫がある。作中人物を生かし、real なものと感じさせるには、読者の胸中に無我意識 (id) と自我とを絶えず争わせておかなければならないが、Steinbeck は読者の情緒と知性とを分離させ、もつぱら精神的緊張を喚起させることに成功したのである。

文書で証明された調査、あるいは事実には忠実な直接的調査の上に、人間生活に関する資料を、文学的效果をねらう微妙な感覚をもつて組立て、読者の想像や精神を楽しませ満足させるような形体にまとめ上げる彼の手腕は Anatole France を思わせ、また、Chekhov と比肩させる。しかし、Steinbeck は生活に関する資料をすべて一度変形させ、ある意味の網の中に入れ、それに簡素化された人物、理想化された性格などを配して——次のような比較が許されるならば——ギリシャ悲劇や Homer 風な叙事詩の形にまでもつて行くことができたのである。

Great Depression という素材に審美的価値を与え得たのは Steinbeck 一人であると称される。それは彼の散文の文体が素材を示すと共に、それを評価しており、彼の structure が素材に秩序を与えると共に、それにある意味付けをやっているからである。労資間のたたかいの公平、冷静、強力な分析は *In Dubious Battle* でなされ、人間の社会的、心理的、精神的状態の象徴は *Of Mice and Men* に見られ、テーマ、志向、規模、言語は *The Grapes of Wrath* をアメリカの一叙事詩たらしめた。彼の自然主義は機械的なものを越えて超絶的なものにまで行つており、自由な人間精神への信念と、精密な科学精神は、内奥の真理にまで行くという信念をその二大要素としており、彼の慣例的な form は彼の観念を例証するものであるが、彼はいつも concrete な message を心にいっていた。しかしこの message は技巧上の message に属している。この点では彼は通俗作家²³ではあり得ない。

D. Heiney は Steinbeck の文体を次のように分類している。

- (1) 自然主義的悲劇——*Of Mice and Men*, *The Grapes of Wrath*, *In Dubious Battle*
- (2) Monterey の気ままな田園詩——*Tortilla Flat* (3) 牧歌——*The Red Pony*
- (4) Salinas-Monterey 地域以外における種々な冒険物語——*The Moon Is Down*, *Bombs Away*, 1942
- (5) 象徴的比喩 (喩) 談——*Burning Bright*, *The Pearl*

なお、Heiney は(2)はさほど重要ではなく、(3)は(1)と共にその質において勝れており、(4)はいずれも戦争の宣伝であり、(5)は両作とも大したものではないと附言している。(1)の第一の作は一種の社会性をもち、第二第三の作は明らかに社会的抗議の声を反映している。この三作とも勝れた作であるが、第三の作は文体の点で間然するところはないと C. C. Walcutt²⁴はいう。(2)は非常に親しみ深い作であり、これを基にして作られた *Sweet Thursday* は音楽喜劇で、形式張つた分析の標準にはかけられないものであり、その文体は散漫で取りえはない。(5)には *East of Eden* を入れることができる。しかし、この野心作も文体の点からす

ると、その fatuity を責めなくてはならない。このような彼の文体の発展の中に、われわれが感じとるものは、Magny の文学的表現を借用すれば the peaceful confidence of a man treading the countryside, his countryside, with a steady, kindly stride, assured that he will arrive at a halting place in the evening, wherever it may be²⁵ である。Steinbeck に一貫して流れるこの自己信頼感こそ、彼をして無造作に、また、気安く、人間存在の深淵をのぞかせるのであり、それは各著作を通じて種々な形をとつて表わされている。例えば *The Long Valley* では、何らの恐れげもなく人間の魂の奥底を熟考しており、*In Dubious Battle* ではアメリカ社会の醜聞の告発をやり、*The Vigilante* ではある男に私刑をやらせ、*The Snake* では一人の女に sadistic な本能を見せたりする。このような作に限らずその他の作を読んでみても、われわれは不思議に面くらうこともなければ、当惑してページを閉じる必要も感じない。人間への失望感、絶望感が全くないのは、作者の自己信頼感が強いからである。読者はこの信頼感にいやみとひとりよがりのないのを快く思う。これは Steinbeck の一大長所である。

次にひとこと彼のユーモアに触れてみたい。人間は自分のやる仕事によつて位置づけされるが、さらにその仕事を乗り越えて自己の歴史を作る努力をするものである、と言うのが、Steinbeck の気持でありユーモアである。これは H. Slochower が *No Voice Is Wholly Lost*, 1946 の中で言っている言葉である。このユーモアは包括的、総括的観察をもつて人生や世界の姿をあるがままにながめ、人間の愚行や過誤を鋭い知性で取扱い、同情と愛情を対象にそそぐものである。Steinbeck は特にユーモア作家というのではないが、やはり彼の作には美的概念としてのユーモアが見られる。彼は Saint Francis や Robin Hood や Shakespeare の Forest of Arden などに見られる distance の敏感な哀感を自分の物語に与えようとしている。この哀感を巧みにユーモアで色付けしている。このユーモアは心楽しいもので、Don Quixote や Sancho Panza や Dulcinea Del Toboso (ドン・キホーテが心の恋人として選んだ Alonzo Lorenzo に与えた名)²⁶ などの持つていたものである。彼の作品に見られるユーモアをしいて類別すれば、*Tortilla Flat* では茶番狂言的であり、*Saint Katy the Virgin* では Rabelais 的であり、*The Grapes of Wrath* では民間的であり、*Cannery Row* ではやさしいものであり、*The Wayward Bus* では Swift 流ということになるであろう。George Snell が Steinbeck と Dickens との類似を論じている中に、この兩人が同じようにユーモアを愛したことを記した箇所があるが、それは同種のユーモアであつたと推論される。

さて、このようにユーモアを解しそれを愛した彼が、批評家や一般読者に対してとつた態度や気持について附言したい。Steinbeck の批評家に対する不信の念には非常に根深いものがある。W. O. Ross は Steinbeck の神秘的気風を力説しており、その他の批評家も同じことを言っているが、彼はこの神秘的という語をひどくきらい、かつ、それを是非棄てさせてしまおうと誓つたこともあつたほどである。人気に対する彼の恐怖心はほとんど病的で、恐怖症に近いものがあつたが、これは生来の内気によるのではなく、むしろ、世間の注意が自分の芸術的誠実さを左右するかも知れないことを恐れたからであつた。彼を感傷的な通俗作家であるとする二三の批評家の言葉のため、彼は極端に皮肉になつたと言われる。批評家や一般的な知識人に対する彼の態度は、責任を要求するような50年代の反抗心ではなく、20年代のボヘミヤ的謀反心に近い反抗心であつた。しかし、より高い真理に対する批評家の個人的

觀念に巻き込まれることは、polemics や慰ブ（撫）のために、自分の芸術を汚し、また、それを棄てることである、と考えるだけの心の余裕はあつたのである。

(8) versatility

Steinbeck は 1929 年から 1939 年までの間に 10 冊の本を出した。そのうち最初の 9 冊は内容、調子、文体などが全く異つてゐるが、その後もこの傾向は続いている。*Tortilla Flat* の後に *In Dubious Battle*, *Of Mice and Men* の後に *The Grapes of Wrath*, その後に *The Moon Is Down*, *The Pearl* の後に *The Wayward Bus*, その後に *Burning Bright* というように。この間の事情について彼は言う。My experience in writing has followed an almost invariable pattern. Since by the process of writing a book I have outgrown that book, and since I like to write, I have not written two books alike... If a writer likes to write he will find satisfaction in endless experimentation with his medium... techniques, arrangement of scenes, rhythms of words, rhythms of thought.²⁷ このような作風の変化を P. Lisca は change of pace と呼んで Steinbeck の特徴の一つとし、A. Kazin は Steinbeck の有名な versatility であると称し、これあつてこそ彼の名声は得られたのであるとなしている。あらかじめ細部にまでわたつて地図を描きながら小説を書くのではなく、書きながら物語や登場人物について多くを学ぶ、というやり方をする彼は、決して二度とは同じものを繰返さない。と言つても、彼はテーマを抑制する不変的な基本態度を相対的には保持してゐたのである。同じものを繰返さないこの能力も、彼の進むべき道を感じ取る必要を次々に暗示しただけのことである。Steinbeck の言う endless experimentation も、その都度、局所的な問題をさらに一般的永続的なものと組み合わせる最上のテーマと取組んだわけではなかつたのであり、その実験のやり方にも問題があつて全的に成功したのではなく、特に 1947 年の *The Wayward Bus* 以後、彼の筆勢が急激に衰えていることは注意しなくてはならない。「その理由としては、彼が California の親しみ深い『long valley』から New York の上流の人びとの住む East Side へ移つたことと、平民、浮浪者、paisanos から Broadway や Hollywood や、あるいは国際的な知名の士と個人的接触をしたことによる附随的变化が彼の作品に現われたためであらう」²⁸

しからばこのような作家である Steinbeck が、その思想の面において、または文学の面において、影響や感化を受けた人びとはだれであつたであらうか。まず、思想の面では Hume, Rousseau, Emerson 特に Comte が上げられる。Comte と彼とは同じ思想の流れに立つていたと考えてよい。なお、忘れてはならないのは、15 年間の交友関係を続けた親友 Edward F. Ricketts の存在である。文学の面では J. B. Cabell (*Cup of Gold* において)、Donne Byrne.²⁹ この二人について彼は These men were specialists in sound—and that's what I was after.³⁰ と述べている。なお、Hemingway の影響を受けたのは 1933 年の作 *To a God Unknown* 以後であることを彼は認めている。一方彼が賞賛した作家は Thackeray, Lawrence, Anderson, Cather, それに 19 世紀のロシア作家などであり、彼が終始関心を寄せていたものには Bible, Apocrypha, 古代インドの文学, Goethe, Dante, Herodotus, Xenophon, Thucydides などがある。東洋文学や初期キリスト教的文献への関心は *To a God Unknown* にまでさかのぼる。このテーマと Rama という女性の名と表題は Vedic hymns と the Acts of the Apostles に関係しており、この作中に出てくる親切な僧リ ≡ (侶) は *La Vida del San Bartolomeo* を読むのであり、*Sea of Cortez* は Baja California について書いた数

人のスペインのイエズス会士の作品を、彼が親しく知っていたことを立証しており、*The Wayward Bus* は *St. John of the Cross* に通じていたことを示している。その他にも、こうした例はあるが、作品の各論中で触れることにしたい。

Ⅱ 作 品 論

(1) *Cup of Gold*, 1927

「この本は、スペイン本国の血なまぐさい歴史に輝かしいページを書き加えた海賊 Sir Henry Morgan について Steinbeck が書いた史詩的物語である。権勢になかば狂い、二つの野望——黄金の都市 Panama を征服しそれを荒廃させることと、伝説的な美しさが男を狂わせる La Santa Roja と呼ばれる女を捕えて自分のものにすること——に酔いしれた一人の男の物語である」³¹

これは Steinbeck が27才の時の処女作で、イギリス、西インド、パナマなどを背景とした大胆な海賊の物語であるが、その主人公 Morgan の完全に個人主義的な奮闘の体験を記している。Morgan の奮闘は不首尾に終り、やがて彼は皮肉にも中産階級的な家庭の中で死んでしまう。この Morgan が権勢を得ても自分では心しまなかつたことと、Steinbeck が Morgan のある性格を賞揚しながらも、その性格がつくるある型を二度と支持しなかつたこととは興味深いものがある。これを書いたころの著者は個人主義的で冒険を自由に楽しむ生活を唱道し、また blind, doddering worm of the world, すなわち、高貴な心情の動きなどは全く考えることのできないこの虫をチョウ（嘲）笑する大胆な人であり、彼をはぐくんだ時代の価値を、このような個人主義の中で幾分は反映していた。このロマンチックな物語は彼の血統に由来するものであり、彼の作では異例に属する。これは「芸術的には失敗」(F. I. Carpenter) し、「貧弱ではあるが啓示的である」(M. Geismar) とされる。この作が他の作と比べて特に顕著なのは、そのケンラン（絢爛）たる文体であろう。彼の後年の作を読んでからこの作を読めば、別人の作の感が深い。この文体にエリザベス朝の戯曲臭、特に Shakespeare 臭のあることは「a hundred sagging mouths opened on his body and every one laughed blood とあるのを読めば、だれしも Mark Antony の葬儀の演説や舞台外での殺人のことを述べる使者を思い出す³²」という P. Lisca の説明によつても明らかであろう。なおこの作の調子、あや、心像などにはルネッサンス戯曲の反響が入っているようである。この作を評価するには、彼自らが述べた次のような言葉も何らかの役に立つであろう。

Outside of a certain lyric quality there isn't much to it. I rather wish it had never been published. But as long as it has, it can't be recalled, and further printing can do no harm.³³

(2) *The Pastures of Heaven*, 1932

1931年 Steinbeck は *The Pastures of Heaven* のテーマについて The manuscript is made up of stories, each one complete in itself, having its rise, climax and ending. Each story deals with a family or an individual. They are tied together only by the common locality and the common contact with the A——s. I am trying to show this peculiar evil cloud which follows the A——s. Some of the stories are very short and some as long as 15,000 words...I wonder whether you think this is a good plan.³⁴ と述べている。この evil

cloud というのは、16世紀にメキシコを征服したスペイン人たちの、自らを正しとする精神が残した tragic curse のことである。これがこの物語集にまとまりを与えている。Steinbeck はこの作でこの evil cloud を示そうとしたのであるが、後期の作でもやはりこれを明らかにしようとした。しかし、それは果たされなかつた。こののろいは作中人物の多くのものにたつていたため、彼等は緑の牧場に住みながら、人間 (Steinbeck によれば人間の性は善である) はいつも自らが裏切られ、平和な小さい幻でも打ち砕かれるものであることを知っている、という基本的問題の劇的な投影がこの作であると言えよう。この牧場のある谷間には観光客が絶え間なくおとずれるが、人の世の数限りない不幸におぼれながら、この谷間のふちに果てしなく立ち続けている他郷の人たち (もちろん作者自身もその一人であると考えなくてはならない) の胸にも当然数々の無知な希望はある。邪悪な文明を見詰める人間にはいつも新しい希望がわいてくる。無数の苦悩を内包しつつもこの心楽しい谷間を見渡しながら若い Steinbeck は「一体人間の挫折の根源は何であるのか? それは、こののろいのためであるのか?」と自問する。この問こそが、彼に創作のペンをとらせたのであり、この問こそが、いつも彼の脳裏を往来していたのである。

この谷間の社会を構成する人びとは、苦しい過去と、未知数の未来に追い立てられながらも現在を立派に生きようとする慎み深い人たちである。こういう人たちの間には、非常に無慈悲な行為も、激しい意志の争いも、背徳な話も、ひどい盗みも、有害なうそもない。ひと時でもよいから、と天国を求めようとする、この谷間の人びとの残忍性にしても、それはなごやかなもの、憎めないものになつている。この作の主要な人物の一人であり、犯罪的精神異常で保護所送りになる白痴の少年 Tularecito でさえ、みんなの人の為になるような事をして歓迎され、ひよこを殺す鈍感な Raymond Banks にしても、そこにはほとけ心が動いている。また Junius Maltby は好意的な隣人によつて、沼池を勝手につくるのは子供のためにならない、と言われて町に追い返される。この作で Steinbeck は、自然と自然的なものだけに価値があるのであつて、人間は下劣なものであることを示そうとしたらしいが、前述のような人物の例を見ると、その努力は完全に失敗している。しかし、初歩的な irony をもつてする Steinbeck の evil の取扱い方がここにあるのではないか。

この作に出てくる人物を F. I. Carpenter は dreamer という言葉を用いて類別し、そのおのおのはいずれもアメリカで発見されるものであると見なしている。ややこじつけに失するが、これも一つの見方ではありうる。彼によれば、(1) 間違つた理想を求め、所有欲故に失敗するもの。たとえば、狂信者の Shark Wicks, Helen Van Deventer など。筆者はこれに Bert Munroe, 食料品商人, 請負人, 自動車の修理工などを付け加えてもよいと思う。このような人びとは失敗ばかりしており、成功への道をふさぐように思われる悪意ある運命との戦いに破れている。(2) 歴史的には健全なものであつても、現在では何の役にも立たないようなそれぞれ異つた理想を求めるもの。たとえば, Richard Whiteside, Pat Humbert など。(3) スペインの征服者とインディアンの混血土人である paisanos と, children of nature。たとえば Lopez 姉妹, Tularecito。(4) children of nature³⁵ であると同時に children of civilization であるもの。たとえば, Junius Maltby など。Carpenter が上げているような人物はいずれもアメリカの夢の破れ方を象徴している。その破れ方の technique は二つ考えられる。その一つは、この作を全体として見る時のもので、自意識的な夢の刺激 (Cup of Gold におけるような) を繰返すというもの。他の一つは、夢を暗黙的なもの、無意識的なものにする

いうものである。

この作中の人物はすべて pseudo-realistic で、その物語のテーマはロマンチックな理想家であるか、ロマンチックな所有であるか、あるいはロマンチックな挫折かである。この作は人間の大望を挫き、人間の尊厳を汚す神秘的な運命の問題を中心としており、この作中の不幸な出来事や小さな悲劇の連続は、人間の希望とか応報をいよいよ説明しがたいものになっているのである。われわれは、この作の中核的なものとして苦い悲哀を考えねばならない。辛さに変わる喜びへの、または、陽気の果ての悲嘆への郷愁がこの苦い悲哀である。この悲哀を縫うようにして抒情的な快樂、挫折、忍従などが一つの調子となつて織りなされ、そのおのおのがまた別の姿を伴っている。

The Pastures of Heaven (これは *The Corral of Earth* の意である——Carpenter) の素材は *Cup of Gold* のロマンチックな素材とは異り、その構造も *To a God Unknown* の取扱にくい神話的構造とは異つたものであり、*Long Valley* に住む普通の人間という、すぐ間に合う新鮮な材料を用いてそれに専念していることを示している。また、注意深く考案された構成と、あちこちに見られる皮肉とで、意義深い形体に確実な材料を適用できる能力を示していることで、彼の経歴中重要な時期を画すものである。この作は *Cup of Gold* や *To a God Unknown* よりさらに正確に Steinbeck の将来を指示している。もつとも彼の道はまっすぐではなかつたのであるが、Viking Press と関係のある編集者の Robert Ballou はこの作を one of the most distinguished novels I ever read in manuscript であると言っている。

(3) *To a God Unknown*, 1933

この作は始めは *The Green Lady* と呼ばれ、次いで *To an Unknown God* と題されたが Steinbeck の作中これほどその内容が広範囲にわたつて書き換えられたものはないそうである。これは、一言で言えば、土地に取りつかれた Joseph Wayne という男の物語である。彼は20世紀になろうとするころ Vermont から California へ移住し、海から余り離れていない Nuestra Señora という奥まつたところにある豊かな谷合いの農場で開拓者として身を立てようとする。彼の後を追つて兄弟や家族のものもそこへ行く。彼らは、よい年が続いている間は、牧場でひどく裕福な田園生活を送つた。この作は、この男の結婚を、あるいは、ひでりや失敗との戦いを、さらにはこの男の死などを物語っているが、主な興味は、土地に対するこの男の神秘的な感情と、その土地と彼との関係にある。この作には陰謀家である一人の年老いた小男が出てくるが、この男は夜になると決まつたように、いけにえにするために、うさぎやりすや小鳥を殺す。若い Joseph は放浪中ふとこの男に出合う。Joseph ははつとして「この男は自然の secret を知っているのだ……ひよつとしたらそれを教えてくれるかも知れない」と思う。この secret は犠牲の代シヨウ(償)によつて、目に見えぬ神から伝えられるものであろうか? と Steinbeck は Joseph と同じように考えるのであるが、彼はその後の作品においても種々な名称でこの secret を展開することになる。C. C. Walcutt の言う counterpoint of mysticism and absorption in natural process³⁶ はこの作から始まるのである。さてこの secret はこの作では、生存者の厳しい論理の原始的な parallelism であり、*Of Mice and Men* では当然のことながら愛すべき病理という仮装を着け、*The Raid* (*The Long Valley* 中にある) や *In Dubious Battle* では苦痛によつて立証される洗礼となり、*The Snake* では性的含蓄となる。*The Red Pony* では血なまぐさい犠牲も当然自然界の法

則であつた。Life must be sacrificed to life, and God, the Unknown God of Nature, is as bloodthirsty as his creation.³⁷

新しい姿をもつた荒地と、そこへの入植者の生活とに対する深い思いやり、原始的な心理と、宗教に対する知的な関心などを取扱うこの作の総体的テーマは、the Rig-Veda (詩篇ヴェーダ) から引用された繰返しの反復句が示しているように Who is the God to whom we shall offer sacrifice? ということである。このテーマには、神秘的でロマンチックで不気味なイギリスの物語作家 A. Machen (1863—1947) 的なところはあるが、De Quincey 風なローマン性はない。人間と土地との神秘的な関係を退屈な程強調しているこの作は、知られざる神には必然的に附随する説明不可能な崇物狂的神秘的な宗教的フン(霧) 囲気についての、あるいは、合理的思考では真の姿をとらえられない naked thing についての描写であり例証でもある。また公式的宗教、異教的儀式、超自然的考案などが記述されているが、大じて成功してはいない。この作を neo-pagan literature と評し D. H. Lawrence, Jean Giono (1895—), S. Anderson (少しちがった意味で) の同類であるとしているのは Geismar であるが、この見方は正しいと思う。

Lawrence を思わせるような erotic compulsions など魅惑的な描写もあるが、realism としては全般的に内容が信じ難いものであり、symbolism としては R. Jeffers の詩に見られるような幻想的な壮大さもなく、幻想の最大小説と目される W. H. Hudson の *Green Mansions* のような情緒的な力もない。*To a God Unknown* は一種の夢物語で、後年の作に見られるような筆勢はないが、地方的なアメリカ的主題の取扱いには、読者の好奇心をそそるような特異性があり、彼の多能の一面を表示していることは間違いない。Steinbeck の第三作であるこの作は、最も現代的な文学の絶望を乗り越えて象徴的写真主義ともいべき新しい行き方を試みたものであると考えられる。*Cup of Gold* では偶然的であり、*The Pastures of Heaven* ではあらわな骨組であつた夢の動機もこの作では筋とは切りはなせないものになっている。この作は彼の文学的修業の一つの結末であるが、同時にまた一つの新しい出発でもあることは確かである。彼のその後の作はいずれも夢を客観的に叙述しているが、その夢が selfless である場合は、その叙述は個人や社会の幸福に貢献する。*Tortilla Flat* 中の paisanos にしても *Of Mice and Men* 中の牧場の使用人にしても、*The Grapes of Wrath* 中の Okies にしても、みな大きな夢をいだきその実現のために努力するのである。*To a God Unknown* を手厳しく評したのは E. Wilson で、Steinbeck の作には the ever-present paradox of the mixture of seriousness and trashness³⁸ があるとなし、この作は absurd であるときめつけてはいるものの、「30才を越したばかりの Steinbeck の世界観と世界を動かす³⁹ 諸種の概念への表現を発見しようとする尊くも真シ(摯)な企てであることは明白である」と述べているのを見ても、この作が文学作品としては失敗でありながら、一つの新しい文学的企画であつたことはわかるであろう。文学作品としては失敗であると言いつつ、その文章には expressiveness が目立ち、リズムや英語の成句に対する立派な感覚のあることを示している。感覚に訴える想像と物語の妥当性によつて作られる単純な文章の中に強い一種の反射的傾向を感じさせるのである。こうした表現様式は怪奇な Faulkner や Wolfe 風なものとは対照的である。

(4) *Tortilla Flat*, 1935

Tortilla Flat の各章の表題が Malory の *Le Morte d'Arthur*, 1485にならつたもので

あることは Steinbeck の言葉からはつきりする。I had expected that the plan of the Arthurian cycle would be recognized. Even the incident of the Sangreal in the search of the forest is not clear enough, I guess. The form is that of Malory version—the coming of Arthur, and the mystic quality of owning a house, the forming of the Round Table, the adventures of the knights and finally, the mystic translation of Danny.⁴⁰

なお彼は「*Tortilla Flat* は *Le Morte d'Arthur* の研究から生まれたものである。わたしは Monterey というわたしの町の物語を取上げそれを一種の民間伝承にしようと思つた⁴¹」とも言い、この作の「主眼点は、少しは名の知られた人びと、特にわたしにとつては愉快に思われる人びとを披露することであつた⁴²」と述べ、さらに「それぞれの事件の間に、その事件を道徳的、審美的、歴史的に——と言つても、paisanos 自身のやり方で——解説する説明者を入れることについてあなたはどう思いますか？ もし入れるとすれば *Gesta Romanorum* (13,4世紀に編集された物語集で平俗ラテン語で書かれている)、すなわち、坊主臭い道徳律の盛りこまれた突飛な物語集や、欽定訳聖書中のソロモンの歌——そこには Shulamite が実はキリスト教会堂であることがわかる愉快な章の見出しがある——の持つ魅力をこの本に与えるようになるでしょう。もちろん、そういうものとは比較にはならないでしょうが。しかし、ささやかな対話は、少くともこの本の形体や悲劇的なテーマや作中人物の強固ではあるが銘々別々な哲学的道徳律などを明らかにすると思ひます。この作には一つの物語群があるわけです。人のつき合いというものは、結ばれ花咲きやがて亡びるものであることを思い出していただきたい。この本を通じて確乎たるテーマを持つというのではなく、わたしの意図の一つは、このような人たちの生活におけるいかなる事でも、その日の夜を過ぎてまでも続くことは、まず無いということを示すことなのです⁴³」と、こまごまとこの作の目的や自分の気持ちを伝えている。

Tortilla Flat というのは Monterey⁴⁴ にある人口チュウ（稠）密な地域の名であり、そのあたりには松林が点々とし、そこに丸木小屋を建てて住んでいるのがこの作に出てくるいわゆる paisanos と呼ばれる、愉快で無気力で得体の知れない人たち——動物的コウカツ（狡猾）さのある生活を営み、魅惑的に、あるいは、喜劇的に単純な行状を示す人たちである。彼らはほとんど財産というものは持たず、市民としての心づかいも、また金銭上の心配事にも無関心であつた。paisanos とは「スペイン人、インディアン、メキシコ人および各種入り混じつたコーカサス人などの血の混入したものである。彼らは特有なアクセントで英語とスペイン語をしやべる。民族は？ と尋ねられると、ふんとして、純粋なスペイン系である⁴⁵」ことを主張し、服の袖をまくり上げ腕の柔らかな内側が白色に近いことを示すのである」と、Steinbeck の説明にある。

Tortilla Flat は自然的であると思われるすべてのもの、特にその極端なもの、あるいは、完全に無道徳なものに対する作者の愛情を基底としている。したがって、それは原始主義的であるが、18世紀のものとは異つている。自然人、単純な人、経済などには無トン（頓）着な人、そうして F. Bracher の表現を借りれば a civilization which drives itself to the verge of nervous breakdown finding new ways to cure the sick and kill the healthy, to pamper the body and stultify the spirit⁴⁶ このような文明のいだけ多くの矛盾の中には巻き込まれたくない人たちのやることは *Tortilla Flat* 風に考えれば正しいことになる。この作で通常の道徳的価値が逆になつてきているのは当たり前である。paisanos をさらに説明しこの間の理

解に資したい。彼らはおしやべりすること、酒を飲むこと、人をだますこと、眠ること、情交することをその行為のすべてとするものであるが（ある paisano は wine, food, love and firewood⁴⁷ が欲望のすべてであると言つてのける）、自らの瞬間的存続のためには出来る限りのことをやり、貧しい生存を想像の美しい生活に変えたり、愚者が恐れて踏みこまないような所へも突進して行く天使でもある。すべての極悪非道も腹の内は白いと信ずる Steinbeck はこの天使の肉体がライ病におかされているなどとは考えるはずもない。彼らは一種の無政府主義者であり、奇妙なキリスト教的共産主義を実行し、各人は自らの必要に従い能力に応じて隣人から盗みをするのである。彼らがうそをつき物を盗み気の向くままに姦淫しても、この作者にはとがめ立てはなされない。Steinbeck はこの作を茶化した気持で書き、ある程度の投げ出しをやり、口にするのも実は言うつもりのないことであつたりするところを見ると、相当な気持の差し控えがあるようである。彼は決して現実の世界を取扱つたのではなくみんな冗談の話なのである。彼は決して知性を直感と対立させようとはしない。これは大体 W. O. Ross の説くところである。叙事詩的な言語と行動を使つての茶番狂言を戦術という言葉で呼ぶならば、この戦術の中に気持の差し控えはないと論じ、それが Steinbeck の偉大な点であると強調するのは P. Lisca である。両者のこのような見解の食い違いは問わないこととして、この作固有のユーモアをもつて作中人物を審美的な範囲内に止どめている事実は高く評価されねばならない。この固有のユーモアとは、道徳的には欠けるところのある paisanos の持つている善なもの、高貴なものをわれわれに尊敬させるようなものことである。

Tortilla Flat の特質としては、生きることと感情とを一つに織りこんだある様式（これは、いなかじみたメキシコや中世紀のイタリーを思わせる）をその主題に選んだということ、Big Joe Portage が愛情を持つようになつたいきさつとか、その友人たちが the poor Pirate を救つた様子などを書いた章をふくむ全17章（偽りの形をしたこの英雄物語も実はぼろ服をまとつた人たちの不幸な出来事を述べているのである）が原始的なカリフォルニア人の夢と現代社会のからくりを対照させたということなどが上げられる。

この作は一連の出来事をつづつたもので、C. Dickens の *The Pickwick Papers* や A. Daudet の *Les Aventures prodigieuses de Tartarin de Tarascon* などと同じ構造をもっているが、数種の喜劇的な作を非常に巧みに組合わせたもので *Don Quixote*, *L'Histoire de Gil Blas de Santillane* (Le Sage の作), A. France, C. Lamb など思い出させる (J. W. Beach)。さらにこの作は *Le Morte d'Arthur* の簡素で雄大な手法と *Fioretti di San Francesco* の甘美な単純さをもっている。なお L. R. Gibbs の It [= *Tortilla Flat*] is an extravaganza, with a good deal of slapstick comedy, a touch of parody (of the *Morte d'Arthur*), and many examples of the author's innuendo.⁴⁹ という評言はこの作の性格を簡潔に要約している。一般の批評家は事件の内的一貫性がこの作にあることに気付いていないが、原作者自身はそれを確信しているようである。この内的一貫性もさることながら、この作が written for relaxation⁵⁰ なるものではあろうが、この作の文体と調子⁵¹の見事な統一は paisanos の the strong but different philosophic-moral system の探求と、この本の悲喜劇的テーマと呼ばれるものを一層明らかにするのに役立つ。この different philosophic-moral system とは心理学的に言えば rationalization であり、G. Orwell によれば double-think である。この作のあらゆる出来事はこういう論理構造を持つているが、natural な人

びとの神聖化とか、Steinbeck のいわゆる literary slummers を楽しませることが主たる目的ではなかつたのである。陽気で無責任で魅力的なこの作は、文体からしても内容 (paisanos の破壊的行為) から見ても、叙事詩であり笑劇的である。

Tortilla Flat は写実主義などと言われるものではない。その人物は exotic で romantic であり、また詩的でもあり、結局これはほとんど一種の幻想であり、神話の世界を創造している。また、物質と精神の闘争の本質的には喜劇的な歴史を書いたものである。この喜劇的精神を Steinbeck は社会の様相判断の手がかりとしているが、*Tortilla Flat* の世界には美德はありながら、それは一般人間の努力すべき理想にはなっていない。しかし、論題を見事なユーモアで展開しながら、彼は道徳論の実際的で微妙で全く形式化されたおきて (これは paisanos の明らかな不道徳の根底となつている) をとらえて、物語を緊張したものにしている。このようなおきてを動力時代の道徳に結び付けながら社会価値の啓示的な比較をやつていたのである。この作に出てくる無一物な者についての Steinbeck の見解がどれほど常規を逸したものであろうと、彼はこの作で始めて過去の神秘的な、あるいは、海賊的な生活とは離れて、社会問題に関係をもつようになつたのである。彼の独特なアメリカ作家としての進展におけるこの作の重要性は見のがせない。前作とくらべてこの作以後の方向は根本的に変化したのである。

Tortilla Flat は11人の出版者に出版を拒絶されながらも、ひとたび世に出るや、前作の *Of Mice and Men* と同じように広く読まれ、傑作として批評家に喝采され、E. Wilson をして most successful production⁵² と言わしめ、数カ月間ベストセラーズのリストにのり California Commonwealth Club の金メダル⁵³ をもらつた。この作が、成功したことについて Steinbeck は Curious that this second-rate book……should cause this fuss. People are actually taking it seriously.⁵⁴ と言ひ、なお I am scared to death of popularity……とも述懐している。しかし、この作はアイルランドでは輸入禁止となり、また、Monterey の商業会議所の手で、その内容が虚構であると発表されたこともあつた。この作をある映画会社が4,000ドルで買ったが、二三年後その編集者はその作を買いとつたかどで首になつた。ところが後日彼はそれを Metro-Goldwin-Mayer 映画会社に9,000ドルで売つたと伝えられる。この作が Hollywood で映画化された時、Steinbeck は直接的にはそれに関係はなかつた。*A Medal for Benny* という題名の映画は彼の台本を基にしたものである。どちらも一流の出来ばえであつた。

注

- 23 Donald Heiney: *Recent American Literature*, p. 230
- 24 Charles Child Walcutt: *American Literary Naturalism*, p. 295
- 25 Claude-Edmonde Magny: *Steinbeck, or the Limits of the Impersonal Novel* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 217)
- 26 Joseph Warren Beach: *John Steinbeck: Journeyman Artist* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 90)
- 27 Peter Lisca: *John Steinbeck: A Literary Biography* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 21)
- 28 Peter Lisca: *The Wide World of John Steinbeck*, p. 289
- 29 アイルランド系のアメリカ人で小説家 (1889—1928)

- 30 27 と *ibid.*, p. 5
- 31 Bantam Books 版の見返し。
- 32 28 と *ibid.*, p. 34
- 33 Lewis Gannett : *John Steinbeck's Way of Writing* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 24)
- 34 *ibid.*, p. 25
- 35 Frederic I. Carpenter: *John Steinbeck: American Dreamer* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 72)
- 36 24 と *ibid.*, p. 259
- 37 Maxwell Geismar: *Writers in Crisis: The American Novel: 1925—1940*, p. 250
- 38 Edmund Wilson: *Classics and Commercials*, p. 45
- 39 *ibid.*, p. 43
- 40 33 と *ibid.*, p. 27 (1934年3月出版者にあてた手紙)
- 41 John Steinbeck: *My Short Novels* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 39)
- 42 40 と *ibid.*
- 43 40 と *ibid.*
- 44 Monterey は無法的で、ぎしぎしした感じのする町で、Steinbeck の有名な作品名となつた Cannery Row (かんづめ横丁) はここにある。またその海岸には小屋が多く、町の近くの陰気くさく荒々しい美しさのある場所にはちよつと場ちがいな素晴らしいゴルフ場がある。この町には立派なドライブ・ウェイがあつて観光客が絶えない。
- 45 26と *ibid.*, p. 86
- 46 Frederick Bracher : *Steinbeck and the Biological View of Man* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 194)
- 47 Stanley Edgar Hyman: *Some Notes on John Steinbeck* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 157)
- 48 *Tortilla Flat*, chap. 7 参照
- 49 Lincoln R. Gibbs: *John Steinbeck : Moralism* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 95)
- 50 33と *ibid.*, p. 28 (出版者にあてた作者の手紙)
- 51 33 と *ibid.*, p. 27
- 52 28と *ibid.*, p. 198
- 53 California の作家の手になる最優秀小説に毎年与えられる。
- 54 33と *ibid.*, p. 28